

『新人』と綱島梁川

關 岡 一 成

はじめに

小山東助は『新人』十周年記念号に「新人十年史の断片」を執筆し、そのなかで当初五・六百部にすぎなかった『新人』が三千部にまで飛躍した大きな要因を二つあげた。

一つは二巻一号から一年間にわたって『新人』と『福音新報』誌上で海老名弾正と植村正久との間に繰り広げられた神学論争であり、もう一つは綱島梁川（一八七三—一九〇七）の誌上での「靈的活動」であった。

梁川は文芸・美術の評論、倫理思想の分野でも活躍したが、もっとも注目されたのは晩年の宗教思想である。『梁川全集』の編集者である安倍能成は、一九〇四（明治三七）年ごろからの梁川の宗教思想に当時の青年が大きくゆさぶられたと述べている。そして、その宗教思想の主なものが発表されたのが『新人』であった。梁川といえは「見神」ともいわれるほど有名になった三回にわたる見神の体験を「予が見神の実験」として発表したのも『新人』であった。

『新人』は梁川によってそれまでとは違った読者層を得たし、梁川にとってもかれの独自の宗教思想を発表する専

門誌としては『新人』は格好の雑誌であったのである。

また、梁川と『新人』の関係を考える時に、忘れてならないのはその執筆陣の中に多くの梁川の影響を受けた人達がいることである。魚住影雄・宇佐美英太郎（不喚樓）・一色義朗（醒川）・金子卯吉（白夢）などはその代表的な人物である。

このように『新人』と梁川は深い関係にあったこともあり、梁川が死去した日には、『新人』を発行していた新人社を代表して千田時次郎が、葬儀の日には内ヶ崎作三郎が弔辞を述べている。死去の翌月発行された『新人』八巻一〇号は梁川の追悼号とされた。

この論文においては、梁川とキリスト教とのかかわり、『新人』と深くかかわる契機となった海老名との関係、『新人』における主張。さらに、海老名の紹介で梁川に会いかれに傾倒することになった二人の弟子、魚住影雄と宇佐美英太郎をとりあげて考察することにした。

一 梁川とキリスト教

梁川のキリスト教については、白隠禅師や親鸞への傾倒から、仏教の影響が強く、念仏を唱えるなどしていたこともあり、そのキリスト教理解は、異端・邪教視されがちである。

しかし、かれの宗教思想はキリスト教を中心としたものである。たしかに、三位一体・贖罪・奇跡などを否定したが、唯一人格神をどこまでも基本としており、仏教もこの視点から解釈して取り入れているものである。一見したところキリスト教と仏教を習合させているかのように見えるかれの宗教思想も、本質はキリスト教である。この梁川の

キリスト教理解は基本的に海老名と通じるものがあつたからこそ、最後まで『新人』誌上で活躍できたのである。

さて、では梁川はどのようにしてキリスト教と出会い、受容するに至つたのだろうか。梁川こと綱島栄一郎がキリスト教に入信したのは、故郷岡山県・有漢村で母校の知新小学校の助教をしていた一四歳の時である。かれにキリスト教を紹介したのは同じ村の医師神崎秀甫であつた。神崎は医学の恩師がキリスト教に熱心であつたところから、その影響でキリスト教に関心を持ち、高梁教会（組合教会）で森本（松村）介石から洗礼を受けた。かれは自分が住んでいた、高梁から一五キロほど離れた、有漢村に講義所を設立し、定期的に牧師を招き伝道をしていた。

梁川は、この神崎をはじめ先輩の信徒の影響のもとで、一八八七年高梁教会で古木虎三郎牧師より洗礼を受けたのである。かれは古木牧師、高梁教会や有漢講義所に来訪する同志社の神学生との交流（山室軍平などもその一人）などから同志社での勉学を志すようになる。しかし、直前になつて東京専門学校（早稲田）へ進路を変更し東京にでたのが一八歳の時であつた。

東京においても、高梁教会と同じ組合教会の本郷教会に通つた。当時牧師は横井時雄であつた。しばらくして、植村正久の市ヶ谷講義所に通うようになる。この変更の理由ははっきりしない。当時新神学の影響で横井などもこの思想に傾斜しつつあつた時期なので、それが原因の一つとも考えられる。しかし、植村の正統的信仰・福音主義にも満足できなかったのか、また学校での大西祝の影響もあつてか、正統的信仰を脱し、ユニテリアンの信仰を抱くにいたり、教会の礼拝にも出なくなる。

理性に根拠をおく合理的信仰。道徳・倫理を最高のものとして、倫理でもって宗教に代えられると信じるようになり、卒論として「道徳的理想論」を書いた。

しかしその後、病気になるということもあつて、理性・倫理を中心とするだけではどうすることもできない寂しさ

を味わうようになる。そして、天地の父が恋しくなると、日記に記し、人格的な神の必要性を痛切に感じ始め、再び宗教に真剣に立ち向かうようになった。

梁川にとっては人生の転換期ともいうべきこの時期に海老名と出会い、大きな影響を受けたのである。海老名との出会い、交流については後述するが、梁川が海老名から受けたものは「神子の意識」である。かれはこの意識により、信仰の確信を得ることができ、また後の見神の体験もできたのである。

二 梁川と海老名弾正

梁川が書いたものに海老名の名前が最初に出てくるのは、有漢時代の一八九一（明治二四）年三月二七日の日記においてである。

今晚高梁教会にては二三日前伝道会費徴集の爲めに巡来せられし海老名弾正氏一場の説教を催さるゝよし、氏は我国基督教社会一方の勇將にして、殊に能弁美辭の聞え高ければ、今晚はさぞ聴衆も多く盛会なりしならん。余も今日教会より報道ありしかども、生憎村長の慰勞会もあり、且つ時も已に遅そかりければ、遺憾ながら出會する能はざりき。

この当時、海老名は日本基督教伝道会社仮社長であり、その募金活動で高梁に行ったようである。日記にもあるようにこの時には、直接話を聞いていないので、有漢時代には二人は出会うことはなかったと思われる。

実際に、梁川が海老名の説教を聞いた最初は、東京に出て二カ月半ほど経った一八九二（明治二五）年三月一九日夜、神田錦輝会館の演説会においてであった。この夜海老名は、田村直臣・松村介石・ホワイトの三人とともに講壇に立ち「義人の生命」と題して演説したのを聞いたことが記されている。また翌日の二〇日には梁川が通っていた本

郷教会で同じ「義人の生命」と題する演説を聞いたと記している。ただし、どちらの場合もその内容や感想は記していない。

梁川が海老名と共鳴するようになるのは、かれが病気になるって再び宗教に真剣に目を向けるようになって以来のことである。

一八九六年四月に突然咯血した梁川は療養を余儀なくされるが、七月からは医師の紹介で神戸諏訪山吉田病院に入院した。この入院中に海老名の神戸教会の礼拝に出席するようになったのである。かれは観念的・理性的な神では心の平安を得られず直接神の懐に入って確かな安心を得たいと願っていた。

知人と二人ではじめて神戸教会を訪れたのは九月六日のことであったが、その時には「海老名氏の説教を聴かんとせしに、最早や終りし時なりき」ということで説教を聞くことができなかった。しかし、翌週の九月一三日には、海老名の説教を聞くことができた。

午前九時より神戸教会にて海老名弾正氏の説教あるよしかねて聞きつれば、注射の終るとすぐに出掛けぬ。已に九時を二十分許過ぎしころなれば、急ぎ行きしに、丁度説教の中期とおもはるゝころにて、海老名氏は今しも日本現今の基督教の風潮につき滔々と弁じつゝあり。丈高く髭長く、羽織袴にて嚴然と正面の壇上に屹立せる風采、一見して基督教界の名士と知られぬ。説教の主意は道徳高く品行正しきものやうやう社会の要路を占めんとするは、今日の傾向なるよしをのべ、基督教がこれに與りて少からざる効ありし事、今日基督教社会の一般に沈滞せる趣あるは、畢竟大確信大忍耐なきが故なる事、たとへ少数なるも神の国と其義しきとを求めて、飽まで屈せずして社会と抗争せば、つひには勝利を得べしといふ事などを、例を援き事実^①に徴し滔々と述べたり。此の容貌すでに莊重、演説はた森嚴明扶、音吐^②々々としてよどみなし。このほども三宅氏は海老名氏をほめて、宮川よりも偉大なる所ありといひしが、予も然りと思ひぬ。

この後、度々礼拝に出席しやがて個人的にも親しくなり、書物を借りたり宗教談を交わす問柄になった。海老名の話によほど感激したのか、東京専門学校時代の同級生である五十嵐力にも海老名の説教の概要を記した書簡を送った

りしている。⁽¹⁰⁾

また同じく同級生で在米の朝河貫一に宛てた書簡の中でも「神戸教会牧師海老名弾正氏に交際して少からざる益を得申候 氏は偉大なる人物と存候 平田本居の神道論を研究して其の大精神の猶太の預言者と異なるなきを見氏みづから二氏の意志をつぎ神ながらの大道を宣伝するを自任せり 堂々たる預言者の高風あり」と称賛した。⁽¹¹⁾

梁川の神戸での療養生活は八カ月余であったが、全快して一八九七年三月に東京に戻ることができた。かれはその際、神戸での療養生活と信仰生活を振り返って次のように記している。

神戸にありしことほとんど八閏月余。此の間わが得たる所を顧み来たれば呆然たるの外なし。宗教の側に於ては予はたしかに一転機して或物を攫みぬ。唯々概念的なる神は嚴然たる実在として予の前に現前し来りぬ。予が一年前道德的の理想を論ぜしをりは、神を空理上より割り出し、論理の必然として客観に置きしなり。今や不然、人格的の神は予が唯一の慰藉者、鞭撻者、鼓吹者となれり。⁽¹²⁾

神戸教会に出席して聞いた海老名の説教の内容や、海老名から受けた宗教的影響の全ては書き残されていないが、梁川にとっては神戸での療養時代の宗教面における最大の収穫は上記のように神を人格的に把握したことにある。そしてこれは、より明確には「神子の意識」という言葉で言い表される。

この稿では詳しく論じられないが、海老名の信仰の根本も神を父とし、自分を神子と理解するところにあった。「父子有親」は海老名のキリスト教理解の中心であり、この神戸時代にはこの確信に立って説教をしていた。

海老名は当時沈滞ぎみのキリスト教界を日本の中心地である東京から活性化したいと考えて、上京を決意する。海老名は後にこの時の東京進出について、卒業後すぐに赴任した安中教会牧師から神戸教会牧師まで、すべて周囲の状況・求めに応じていわば他人が決めた路線に従って決定してきたが、この時の上京だけは自分の意志で決定したというほど固い決意のもとでの東京行きであった。⁽¹³⁾

海老名が上京して再び本郷教会の牧師となったのは梁川が東京に戻った二カ月後の五月のことであった。梁川は早速上京した海老名を訪問した。

神戸教会牧師海老名氏東上して本郷教会の牧師となる。予氏を訪ふて例の宗教談に吾が心を鼓吹せり。黒住宗忠の宗教家として
は平田、本居の上にあるよしを述べ、其の Religious intention のありし事を詳説したり。其の二三の逸事は最も予の心を動か
したり。⁽¹⁴⁾

神戸での療養時代のように教会の礼拝に出席するというようなことは記されていないが、個人的な交流は東京においても継続された。

海老名氏六合雑誌を恵送しくられたり。「神道の宗教的精神」といふ氏の論文おもしろし。⁽¹⁵⁾

午前海老名氏を本郷に訪ひ、種々宗教上の事につき談話す。氏は此の九月より同志会といふが如きものを組織して大に運動するつもりなりと。氏の談話中氏が二十五六歳のころより五年間眼を病み、一切読書する能はざる時の忍耐、覚悟、及びそれが為に精神上の修養をなし、他が万巻を読破する時靜に瞑想沈思心を練りしよしは、最も大なる教訓を予に与へたり。⁽¹⁶⁾

海老名は上京して最初から本格的な雑誌を発行するという意図のもとに『新人』をだしたのではなかった。どちらかというところ、説教・講演では雄弁家で知られていたものの、かれ自身も文章には自信がなく、まわりの人々もその面では期待していなかった。この点では、同級生であった小崎弘道がはるかに勝っていたといえる。

ところが当初は教会報のようなつもりで雑誌が、だしてみると評判がよく本格的にこれをだすことになった。ちょうど熊本から上京して東大生になった三沢料の献身的な働きやその友人の応援でやがて雑誌発行が軌道に乗るようになる。この時代にすでに文筆活動で活躍していたのが梁川であり、おそらく海老名が『新人』への執筆を依頼したところから梁川は『新人』とかかわることになったものと思われる。梁川の『新人』への初登場は第十号という早い時期であった。それ以来亡くなる直前まで、梁川は『新人』に執筆しつづけたし、海老名とも深く結びついていた。

梁川が死去したのは一九〇七年九月一四日夜で、その生涯は三四年三カ月余であった。葬儀は「本人の遺言並に友人の希望」ということで、海老名の司式ということになる。梁川の死去した日には、海老名は福島で集中伝道の最中であつたにもかかわらず、急遽帰京し一七日午後二時に本郷教会で葬儀を行つた。⁽¹⁸⁾

三 『新人』と梁川

『新人』に梁川の名前が初めて登場するのは、一卷十号の「論説」欄で「神の人格性（井上博士の人格論を評す）」と題する論文においてである。そして最後は、亡くなる二週間前にてた八巻九号の「病窓雑筆（三）」であつた。

この間、六年四カ月の間に、梁川は『新人』に二篇執筆している。⁽¹⁹⁾とくに最後の二年間に一六篇執筆しており、晩年のかれの主な著作活動の舞台がこの『新人』であつたことがわかる。

『新人』には梁川が直接に執筆したもののほかに、生前中の梁川の著書の紹介、さらにかれの提起した「見神」をめぐる論稿、八巻十号の追悼号、さらに十四巻十一号、十二号に掲載の記念講演など、生前はもとより死後も梁川関係の記事は何度かでていゝ。⁽²⁰⁾

このように『新人』と梁川は密接な関係にあつたのであるが、その結びつきは先述したように海老名との神戸での交流に端を発したものである。その意味では非常に個人的な関係から梁川は『新人』の執筆陣に加わつたことになるが、それ以上に梁川の『新人』での活躍ということでは忘れてならないことは、梁川のキリスト教理解が『新人』の目指したキリスト教理解と一致してゐたことである。すなわち『新人』のキリスト教理解は海老名のキリスト教理解であつたから、それは根本的に海老名との一致を意味してゐたといえよう。

海老名は、植村との神学論争で明確に自らのキリスト教理解を『新人』で世間に示したが、その後の『新人』にはそれに共鳴する立場の論文が次々と掲載された。梁川の諸論文もそれに呼応するものであったといえる。

『新人』に掲載された梁川の二二篇の著作について、一つ一つ紹介・解説するスペースはないので、ここではもともと注目された「子が見神の実験」のみを取り上げ、その掲載へのいきさつや内容について考察しておきたい。

すでに述べたように、梁川の信仰は神戸の療養時代に「神子の自覚」を得て定まったが、その意識がさらに深まったのが「見神」の体験であった。

かれは、それをそれまでの宗教生活の発展の結果「culmination point」⁽²¹⁾「頂点」⁽²²⁾に達したものとしている。

一九〇四（明治三七）年七月・一〇月・十一月と三回にわたる体験を通して「見神」がゆるぎないものになったのを受けて、梁川はこれを何とか世間に公にしたいと願うようになる。

当初は「触発録」⁽²³⁾と題していたのを、やがて「子が見神の実験」として発表することに決定する。しかし、その内容を文章化することやどのように発表するかには相当苦悶した。魚住への書簡のなかで

見神の秘義（多少にても子の自得せる所の）を最も有効に世人に伝ふることを得べきかは此頃の一問題に候。⁽²⁴⁾
如何にして我が見たる神を伝ふべき乎に心悩み居候。⁽²⁵⁾

と悩みぬいた末について「久しく物せんとして物し得ざりし『子が見神の実験』と題する一文草了」⁽²⁶⁾し、これを『新人』に発表したのである。これは三回目の「見神」体験で公にすることを決心してから八カ月後の一九〇五年七月のことであった。

梁川の「見神」体験は「かの基督の一弟子が手もて再生の基督の肉身に触れてさて始めて彼れを見たりとせるが如き官覚的浅薄の意味ならざるや、論なき也」⁽²⁷⁾であった。ではどのような意味での「見神」であったのか。

かれはそれは到底筆舌の尽くし得るところではないとしつつ、その時の体験は「謂はば、無限の深き寂しさの底ひより堂々と現前せる大いなる靈的活動とはたと行き会ひたるやうの一種の Shocking 錯愕、驚喜の意識」であつたとし、さらにその意識をもう少し具体的に表現すると「今まで現実の我れとして筆執りつゝありし我れが、はつと思ふ刹那に、忽ち天地の奥なる実在と化りたるの意識、我は没して神みづからが現に筆を執りつゝありと感したる意識」であつたと述べている。

それゆえ梁川の「見神」は「其は神我の融會也、合一也、其の刹那に於いて、予みづからは幾んど神の実在に融け合ひたるなり、我即神となりたる也」とされるものであつた。しかもこの「神人合一」は、人が完全に神になつてしまふとか、神懸かり状態になつて自分という意識が完全に失われることではなかつた。というのはその「見神」において「神は現前せり、予は神に没入せり、而かも予は尚ほ予として個人格を失はずして在」つたからである。

このように梁川の「見神」は神秘的な体験であつたが、この「見神の実験」がかれに与えたものは、それまでもあつた「神の子」の意識がますます明瞭になり、確信できるようになつたことである。

予は、此くの如くに神を見、而してこれより延いて、天地の間の何物を以てしても換へがたき光榮無上なる「吾れは神の子なり」てふ意識の、模倣的意識ならぬ真実なる吾有として、鬱として表より湧き出づるを覺えたり。われは宇宙の間に於けるわが真地位を自覚しぬ。吾は神にあらず、又大自然の一波一浪たる人にもあらず、吾れは「神の子」也、天地人生の経綸に興る神の子也。

この「予が見神の実験」は『病間録』に収録されて一九〇五年九月に出版され多くの読者を得て、「見神」は明治三〇年代末から四〇年代初頭にかけて、思想界で一大論争を巻き起こすことになる。

海老名・植村の神学論争を巡る論議も『基督論集―海老名氏の基督論及び諸家の批評文―』（警醒社、一九〇二年）として一冊の本になつたが、見神論を巡る論議も宇佐美が編集して『見神論評』（金尾文淵堂、一九〇七年四月）と

なって刊行された。これを見てもいかに当時の人々の関心を集めたできごとであったがわかるであろう。

四 梁川と魚住影雄・宇佐美英太郎

梁川と『新人』さらに海老名と密接に関連する人物の代表として魚住と宇佐美を取りあげて論じることにした。この二人は、魚住が正統的・福音的キリスト教に問題を感じて海老名に近づいたのに対して、宇佐美はユニテリアンに物足りなさを感じて海老名に接近した。その意味では好対照をなす人物で興味深い。海老名のキリスト教理解がオースドックスでないと同時に、ユニテリアンに同情しながらもユニテリアンにならなかった点がこういうところにも表れているように思う。

しかし、同時に両者はそのようなきっかけで海老名に共鳴すると同時に、最終的には海老名から離れて梁川へと移って行ったことは、梁川と海老名の間には違いがあったことも明らかにするものである。

(一) 梁川と魚住影雄

魚住は兵庫出身の人物であるが、姫路中学時代に内村鑑三の『東京独立雑誌』を読みキリスト教に関心を持ち、東京にて一九〇一（明治三四）年六月三日に宮崎八百吉（湖処子）牧師から洗礼を受けた。一八歳の時である。この当時の信仰については次のように記している。

当時僕の信仰はオースドックス中のオースドックスであった。僕は天地の創造を信じた、原人の墮落を信じた。然し旧約の信仰はまだ明かならぬふしがあつたが、新約の信仰即ち処女の受胎、基督の神性、奇跡、復活、昇天、贖罪、基督の再来と其審判、

来世、地獄の劫火等は皆信じた。(中略)かゝる信仰は一年間続いたのである。此一年間の僕の生活は狂信的であつた。大道に向て演説したこともある、日曜学校の生徒を教へることも一年ほどした。⁽³³⁾

かれはこのような信仰を持っていたので、当然のことであるが海老名のキリスト教理解には批判的であつた。しかし、『新人』がキリスト教界で注目され、その誌上で海老名と植村の間で日本人による初めての神学論争が展開されていた頃であるから「恐いもの見たさ」から海老名の書いたものを讀んだりもしていた。そして「僕は悪魔の仕業でかゝるものが書かれるのであると信じた」⁽³⁴⁾

魚住が一九〇二年七月一六日に海老名を初めて訪問した時には、異端を征伐してやろうという意気込みで乗り込んで行つた。しかし逆に、海老名の話のとりことなつてしまふ。「海老名先生の話は宮崎牧師の話よりは、僕の当時の信仰状態に会心のものではあつた」⁽³⁵⁾

これを見るとオースドックスな信仰を持ちながら一方で信仰と理性・宗教と科学の問題で悩んでもいたところで、海老名と出会つたようである。

これを契機として、魚住は宮崎牧師の教会には出席せず、海老名の本郷教会に出席するようになる。正式に転会して本郷教会員になつたのは一九〇三年五月のことである。

魚住は一九〇二年ころから梁川の文章に親しむようになっていたが、この年のクリスマスには海老名の紹介を得て初めて梁川宅を訪問した。その第一回の訪問時より感激し、それ以來たびたび梁川を訪問し指導を受けるようになる。かれは当時一高生であつたが、親しくしていた安倍能成・小山柄絵・宮本和吉などを次々に梁川に紹介し、かれらは梁川を師と⁽³⁶⁾した。

魚住が梁川を初めて訪問してから梁川の死去の日までは、わずかに三年八カ月余であるが、梁川から魚住宛に出さ

れた手紙・はがきの数は一〇二通⁽³⁷⁾という膨大なものであり、『梁川全集』第九巻の書簡集の中でももっとも多く書かれたものである。

魚住の方も、頻繁に書簡をだすだけでなく、在京中にはたびたび訪問している。梁川は、しばらく魚住が顔を見せなかつたり便りがないと、何かあったのか心配でかれの友人に安否を尋ねるほどであった。⁽³⁸⁾いかに梁川と魚住が親密な間柄であったかがわかる。

さて、では魚住と『新人』との関係はどのようなものであったのだろうか。魚住の書いたものが『新人』に出るのは梁川に面談する前の一九〇三（明治三六）年四月一日発行の四巻四号においてである。かれは「ふよう」というペンネームで「文苑」欄に「杀遊」、「感想余録」欄に「弾絃集」の二篇を投稿しそれぞれ掲載された。

これをおわきりに、一一巻一号の「折蘆生」のペンネームで書いた「秋の日本アルプス」まで、約七年間に一八篇⁽³⁹⁾の文章を寄せている。しかし大学に進学してからも遂に編集に携わるまでの深いかかわりを持つようなことはなかった。むしろ、『新人』には批判的で、ある時には「今後新人へもめつたに文を出しますまいと思ひます」とか日露戦争を支持する論調の五巻三号を読んで「昨日は新人を見て余まりに武装のいかめしいのに浅ましく思つて、聖書の研究を買つて来ました」と内村の非戦論を読んで口直しをしたことが記されている。また、一九〇九年には「新人も随分下品な雑誌だ、海老名先生の罪ではない、先生をとりまいてる俗物の罪です」と痛烈に『新人』誌を批判している。⁽⁴⁰⁾

ただ不思議なのは、もう書かないつもりとか、俗物雑誌としながらも思い出したように『新人』に投稿していることである。

『新人』に掲載されたかれの著作でもっとも注目されたのは、親友の一高生・藤村操の自死について書いた四巻七

号の「藤村操君の死を悼みて」であろう。この原稿についてかれは、あまりに身近な、しかもショックを受けた死で、悲しみが乗り移った文章になり投稿したものの編集者が採用するかどうか危ぶんだほどであった。⁽⁴³⁾

日光・華嚴の滝での藤村操の自死は、当時のすべての青年知識人の煩悶を代表するような事件であったといえる。それ故に、魚住の文章はそれら青年のショックを代弁するものであったといっても過言ではない。梁川もこれを読んで「いたく打たれ候。迫らざる筆路のうちに真情流露覺えず涙下り申候」と魚住に書簡を送っている。⁽⁴⁴⁾

また、八巻六号に掲載の「春のこゝろを思ふ」は、梁川からも大分ほめて貰った作品だと喜んで⁽⁴⁵⁾

海老名が日露戦争を肯定したのに対して魚住は絶対的な非戦論者であったことや、海老名が人間や文明を余りにも楽天的に肯定する点が相容れないこともあってか、⁽⁴⁷⁾魚住は本郷教会に籍はおいいたものの一九〇四（明治三七）年ころには礼拝などに出席しなくなっている。⁽⁴⁸⁾

かれは、自分と海老名と綱島の関係についてこのように記している。

海老名先生の私に与へて下された感化は私を綱島先生の思想に導く準備をして下されたのにすぎなかつたと思ひます。（中略）先生に学んだところは「神は父なり」との宗教的意識です、これは私に非常な力を与へた思想であつたので、内村先生の説かるゝ神様のイカメシい親みにくいのに比して、私は神様に対する感情は到底内村先生の思想を容るゝことが出来ません、而して先生に与へられた此「父子」の意識を得やうとの憧れの情は、私をして遂に綱島先生の神秘的実験に走らざるを得ざらしめました。神との交通は私の実験に於て綱島先生ほどに明瞭なものではありません、私は綱島先生の此思想を成就しやうと思つてまだ修養中なのです。今後私の海老名先生に学ぶは其偉大な人格であらうと思ひます、この点については私は内村先生の狹隘をすてなければなりません。⁽⁴⁹⁾

かれは一時信仰から遠のくが、死去する三カ月前の日記には「此春以来出家したい出家したいと思ふていた情は追々進んで来たのである、最近是最も深く其方へ動かされた」と記した。⁽⁵⁰⁾そしてこの時に信仰の師として仰いだのは

西田天香であった。天香は梁川に師事した弟子の一人であるが、梁川自身がかれの信仰と実践を高く評価して「一心同体の友⁽⁵¹⁾」といったほどに信頼していた人物である。

魚住は「秋の日本アルプス」が掲載された年の二月九日にその短い二七歳と一一カ月の生涯を閉じた。かれの遺体は東京で火葬され郷里に送られ、西田天香の司式で埋骨式が行われた。

(一) 梁川と宇佐美英太郎

魚住が二〇歳の学生時代から梁川に師事したのに対して、宇佐美の場合は三〇歳近い社会人として、また梁川とはわずかに四歳違いの年齢での師事であった。

宇佐美が梁川を訪問して始まった二人の交流は一年四カ月で梁川の死によって終わった。しかし家族を別として、晩年の梁川のもっとも身近に接したのが宇佐美であったことは誰もが認めるところであろう。かれは梁川をしばしば訪問しただけでなく、宇佐美から梁川宛のハガキ通信が一八八号に及び、梁川から宇佐美宛の手紙も七十七通の多きに達するほどに頻繁に交流している。

宇佐美はどのような経緯で梁川に師事するようになったのであろうか。

宇佐美が初めて梁川の名前を知ったのは、一八九五年から『早稲田文学』を購読していた関係でその誌上においてであった。その後も時折梁川の書いたものには目をとめていたが、本格的に注目するようになったのは『六合雑誌』(一九〇二年一月発行、二六三号)に掲載の「迷信とは何ぞや(宗教の中心問題を論ず)」を読んで以来であった。この当時宇佐美は熱心なユニテリアン協会員であったが、この論文を繰り返し読むことによってユニテリアンの信仰に疑問を持ち、⁽⁵²⁾ユニテリアン協会の会合で聞いた海老名の「宗教の情熱の盛んな⁽⁵³⁾」のにひかれて本郷教会に通

うようになり、正式に本郷教会の会員になったのは一九〇四年六月であった。⁽⁵⁴⁾

宇佐美はその後も『新人』に掲載された梁川の著作を「殊に能く熟読したが、先生の思想感情が、余の頭に能くはまつて吞込まれるやうに覺えた」⁽⁵⁵⁾しかも、海老名に飽き足らず信仰に根本的疑問が生じたりしていたこともあり、ついに梁川の直接の指導を仰ぐためにかれを訪問することを決意する。

一人で紹介もなく訪問する勇気がないということで、海老名の家に行き紹介状を貰い一九〇六年五月二六日の夜に初めて梁川宅を訪問した。⁽⁵⁶⁾早速翌日に「教兄の御来訪は假そめの事とは思はれず 涙を以て神に感謝いたし居候」⁽⁵⁷⁾という梁川からの最初の書簡を受け取り二人の交流は親密になる。

親しく会うようになって間もなく宇佐美は、病身の梁川を慰めようと六月から「はがき通信」を始める。この通信は翌年の八月まで続けられ一八八通にも及んだ。ある程度まとまるたびに雑誌『新人』・『俳星』・『誠心』の三誌に発表した。『新人』には、「夕かげ草」(第七卷一〇号)・「寒露集」(七卷十一号)・「放情記」(八卷一号)・「羊腸録」(八卷三号)・「ちくさ貝」(九卷四号)と題して掲載されている。梁川はこれを読んで「うれしくてうれしくて」とか「うれしき思を以て読みました」⁽⁵⁸⁾とか書いて宇佐美に礼状をだしている。

この「はがき通信」で「先生の写真を透明紙の袋のまゝで見ている。あなたを慕ふ事乙女を恋ふるが如くありたいと祈をした事がある」⁽⁵⁹⁾などと述べるなど、まるで恋人に対するラブレターのような文章で、これを読んだ友人から「師弟にもあらず道友にもあらずこれ恋也」⁽⁶¹⁾と評されたりもした。

梁川はこれに対して「君に恋はれて僕また君を恋ひしと思ひ候 願はくばこの恋をして『恒久の恋』たらしめよこの恋をして徳に進み神を見るの恋たらしめよ この恋をして一切を包容するの恋たらしめよ 謂ふ勿れこれ分別くさき恋なりと これ恋の自然の拡充に候也」⁽⁶²⁾と応じている。

宇佐美は一九〇六年六月から全面的に梁川に傾倒したが、魚住と異なり本郷教会の礼拝などには出席している。書かれたものから判断すると、教会の会計役員をしていた様子である。⁽⁶³⁾ また寢食をともにして導いた青年を本郷教会に入会させたりもしている。⁽⁶⁴⁾

梁川を中心とした新しい雑誌の発行は、梁川の周囲の人々から声が上がったが、もともと中心的にそれを推し進めようとしたのは宇佐美であった。当初は梁川も賛成したが、後には機が熟していないとして反対して、この計画は立ち消えとなった。⁽⁶⁵⁾

では、『新人』と宇佐美との関係はどのようなものであったのだろうか。かれは正岡子規に師事した俳人であったところから、『新人』が文芸方面の記事を掲載することにより、より読みやすく親しみのある雑誌を目指したところから、俳句・詩・小説などを掲載するようになった流れの中で俳句欄を担当した。

不喚樓主人のペンネームで、六巻三号に「咬豆吟」を執筆したのが最初で、それ以来一〇巻一二号まではほとんど毎号俳句欄を担当している。一一巻になると一〇号にだけ名前がでて、再び一二巻一号から一三巻一号まで連続して執筆をしている。その後一〇年間の空白があり、二二巻八号に不喚書屋主人、一〇号には宇佐美不喚、二三巻一〇号には宇佐美英の名前で登場し、同じペンネームで二四巻一・二・八号の三号に執筆している。⁽⁶⁶⁾ 宇佐美の『新人』への執筆は実に八〇点にも及んでいる。

同じく梁川に傾倒していた詩人の一色醒川（義朗）も五巻一〇号から一二巻一号までに二〇篇の詩を寄稿しており、これらと併せてその内容について論じると興味深いのであるが、俳句・詩にうとい筆者には適さないので他の研究者に委ねたい。

『新人』はキリスト教信仰を中心にするると同時に、他の思想や宗教のよいところを包括するところにその特徴があった。

八巻一号において「宗教界に於ける明治四十年代の新現象」と題する社説で海老名は「儒教的基督教の倫理的なる、神道の基督教の国家的なる、又仏教的基督教の神秘的なる、皆相融合して高大深遠なる基督教を發揮するに至るべし」と結んだ。

キリスト教を中心に神道・儒教・仏教を統合する、というのが海老名の理想であったが、海老名自身は神道の国家的精神、儒教の倫理的精神とキリスト教の調和という点についてはよく説いているものの、仏教についてそのような視点から説いたものはほとんどない。それに対して梁川の『新人』での著作は、主として仏教の神秘的精神との調和を説いたものといえる。

また、海老名が意志を強調し男性的・父的であったのに対して、梁川は情を中心とし女性的・母的であった。

このような意味で、初期の『新人』誌においては、海老名と梁川は補い合う存在であったし、両者の違いもそのような点にあったといえよう。さらに、梁川には海老名にはない文芸・美術に対する理解と造詣があり、この点でも文学に関心のあった魚住、俳人の宇佐美、詩人の一色などが梁川に傾斜したものと考えられる。

注

(1) 『新人』一一巻一〇号、三七頁。

- (2) 川合道雄『網島梁川とその周辺』三二頁参照。
- (3) 『新人』八卷一〇号、二四・六七頁参照。
- (4) 筆者は「網島梁川のキリスト教受容」と題して『神戸外大論叢』（第四十七巻第五号）で詳しく論じているので、この項は簡略に記した。
- (5) 『梁川全集』（以下『全集』）八卷、一四・五頁。
- (6) 同書、一六五・六頁参照。
- (7) 同書、四四二頁。
- (8) 同書、四五五・六頁。
- (9) 一月一日と二月二七日の訪問記とそこでの海老名の談話の要約が『全集』六卷、九〇―九五頁、一一六―一二二頁に記されている。
- (10) 五十嵐力「網島梁川氏の生涯」『網島梁川追想録』一二頁。
- (11) 『全集』九卷、三一頁。
- (12) 『全集』六卷、一四七・八頁。
- (13) 渡瀬常吉『海老名弾正先生』二三三頁参照。
- (14) 『全集』八卷、四七二頁。
- (15) 同書、四七四頁。
- (16) 同書、四七五頁。
- (17) 海老名弾正「新人壹周年」『新人』二卷一号、一・二頁参照。
- (18) 『新人』八卷、一〇号、六七頁。
- (19) 『新人』に掲載された梁川の著作。
 - (1) 一卷一〇号「神の人格性（井上博士の人格論を評す）」
 - (2) 三卷 五号「秋の姿を冥想す」
 - (3) 四卷 四号「哲学事件に関してミュニアヘッド氏の動機論を評す」
 - (4) 四卷一〇号「信のこゝろを思ふ」

- (5) 五卷 二号 「人格のこゝろを思ふ」
- (6) 五卷 八号 「灯影記」
- (7) 六卷 七号 「予が見神の実験」
- (8) 六卷 八号 「安心立命の二法門」
- (9) 六卷 九号 「一家言」
- (10) 六卷 一号 「予は見神の実験によりて何を学びたる乎」
- (11) 七卷 一号 「神子の自覚を宣す」
- (12) 七卷 二号 「断光録(其一)」
- (13) 七卷 三号 「断光録(其二)」
- (14) 七卷 五号 「書簡」
- (15) 七卷 六号 「枕頭の記」
- (16) 七卷 一〇号 「求道の友に答ふ」
- (17) 八卷 一号 「聞光録」
- (18) 八卷 二号 「聞光録(其二)」
- (19) 八卷 四号 「靈的見神の意義及方法」
- (20) 八卷 六号 「病窓雑筆(一)」
- (21) 八卷 八号 「病窓雑筆(二)」
- (22) 八卷 九号 「病窓雑筆(三)」

死後に掲載されたものとしては、以下の号に「うめ草」として短いものが引用されている。

一三卷 二号(うめ草)。

一四卷 一号 「美しき生活(梁川文集)」 「理想的信念(梁川文集)」

(20) 関連記事の主なものとして次のようなものがある。

六卷 九号 中島堅吉 「喜悦の神(見神の実験)」

六卷 一〇号 海老名弾正 「梁川文集を紹介す」

- 七卷 二号 海老名弾正「基督の自覚」
七卷 三号 海老名弾正「予の見神」
七卷 三号 齋木仙酔「網島梁川氏に答ふ」
七卷 六号 思潮子「近時の宗教的傾向に就て」
七卷一〇号 不喚樓主人「夕かげ草」(梁川へのはがき通信)
七卷一一号 不喚樓主人「寒露集」(梁川へのはがき通信)
八卷 一号 不喚樓主人「放情記」(梁川へのはがき通信)
八卷 三号 不喚樓主人「羊腸録」(梁川へのはがき通信)
八卷 四号 不喚樓主人「ちくさ貝」(梁川へのはがき通信)
八卷一〇号 「梁川追悼号」
八卷一一号 網島梁川氏の『労働と人生』
八卷一二号 落峰生記「梁川先生の病状」
一四卷一一号 金子筑水「網島梁川を懐ふ」
一四卷一二号 安倍能成「高山樗牛と網島梁川」
一四卷一二号 金子白夢「明治の精神界に於ける梁川的地位」
(21) 『全集』九卷、二六三頁。
(22) 同書、二六五頁。
(23) 同書、二三四頁。
(24) 同書、二一五頁。
(25) 同書、二二二頁。
(26) 同書、二五四頁。
(27) 「予が見神の実験」『新人』六卷七号、一一・一三頁。
(28) 同書、一一頁。

- (29) 同書、一一頁。
- (30) 同書、一一頁。
- (31) 「予は見神の実験によりて何を学びたる乎」『新人』六卷二一號、一一頁。
- (32) 『新人』六卷七號、一三頁。
- (33) 魚住影雄『折蘆遺稿』三〇五頁。
- (34) 同書、三〇六頁。
- (35) 同書、三〇六頁。
- (36) 同書、七〇六頁参照。
- (37) 同書、六九四頁。
- (38) 『全集』九卷、二五〇頁参照。
- (39) 『新人』に掲載された魚住の著作。
- (1) 四卷 四号 ふよう「糸遊」
- (2) 四卷 四号 ふよう「弾紋集」
- (3) 四卷 五号 ふよう「こゝろの琴」
- (4) 四卷 七号 魚住影雄「藤村操君の死を悼みて」
- (5) 四卷 八号 魚住蒼穹「我趣味を冥想す」
- (6) 四卷 九号 蒼穹子「天弦」
- (7) 四卷二一號 魚住蒼穹「我が来世観と信仰観」
- (8) 五卷 一號 蒼穹生「羊の足跡」
- (9) 五卷 五号 蒼穹生「人語」
- (10) 五卷 六号 蒼穹生「人語」
- (11) 五卷 七号 蒼穹生「人語」
- (12) 五卷 八号 蒼穹生「人語」
- (13) 五卷 九号 蒼穹生「人語」

- (14) 六卷 九号 月影「姉さんの帰省」
 (「此頃小説と云ふもの作つて見たり、笑ふ勿れ九月の新人に出すつもり」『折蘆遺稿』四七一頁とあり、九月号には小説はこれだけなので月影を魚住とした)
- (15) 八卷 五号 魚住影雄「詩境を思ふ」
- (16) 八卷 六号 魚住影雄「春のこゝろを思ふ」
- (17) 一〇卷一二号 折蘆生「秋の日本アルプス」
- (18) 一一卷 一号 折蘆生「秋の日本アルプス」
- (40) 『折蘆遺稿』三九四頁。
- (41) 同書、三八八頁。
- (42) 同書、八六六頁。
- (43) 同書、三七一頁参照。
- (44) 『全集』九卷、二〇三頁。
- (45) 同書、五六〇頁と『網島梁川とその周辺』二〇〇頁参照。
- (46) 『折蘆遺稿』四一三・四二六頁参照。
- (47) 同書、四五〇―三頁参照。
- (48) 同書、三九三・六二八頁参照(礼拝には出席しなくても、海老名宅には出入りしている)。
- (49) 同書、四四九―五一頁。
- (50) 同書、六頁。
- (51) 同書、八九五頁。
- (52) 『新人』七卷一〇号、一八頁参照。
- (53) 同書、一九頁。
- (54) 『網島梁川とその周辺』二二八頁。
- (55) 『新人』八卷一〇号、二四頁。
 同書、二四頁参照。
- (56) 同書、二四頁参照。

- (57) 『全集』九卷、三八五頁。
- (58) 同書、四二二頁。
- (59) 同書、四三八頁。
- (60) 『新人』七卷一―号、二三三頁。
- (61) 同書、二三三頁。
- (62) 『全集』九卷、三九九頁。
- (63) 『新人』七卷一〇号、二〇・二二頁、及び八卷三号、一九頁などから。
- (64) 『新人』八卷四号、三七頁参照。
- (65) 『全集』九卷、五二八・九頁。
- (66) 『新人』最終号の二七卷一―号に宇佐美漂「血（読者の詩）」があるが、この宇佐美は英太郎と同一人物のように思うが、確証がないので一応ここでは留保しておいた。
- (67) 『新人』八卷一―号、四頁。